

[004]糟屋演習林植物調査

初島, 住彦
九州帝国大学助手

<https://doi.org/10.15017/14203>

出版情報 : 九州帝国大学農学部演習林報告. 4, pp.1-267, 1934-01. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

マコナ、ヒゲママコナ、ヒメヤナギ、エヒメアヤメ等満鮮分子を多数に包含す。

肥後南部亞小區は肥後南部、天草全島、長崎縣南東部を包含する區域にして支那中部要素を多分に有するを特徴とす。代表的植物はチクシムレスズメ、チャンテンモドキ、アイラトピカヅラ、ツクシカイドウ、ギンモクセイ、クマガハリンダウ、カラクサハギ、チクシガヤ(筑豊亞小區にもあり)、ウスユキクチナシグサ等にして九州以外内地に於ては未発見の種類なり。

屋久種子亞小區はタカネゴヨウ、クマガハリンダウの如き支那中部要素を有するも固有種極めて多く一亞小區として區分するを適當と考ふ。

對馬亞小區は場合によりては筑豊亞小區と一括して考ふことを得るも満鮮分子を更に多数有するを以て一亞小區と見做しても可ならん(九州の植物地理學的位置に關する詳細は他の機會に發表する豫定なり)。

以上より本演習林を考察するときは日本海側九州小區中の筑豊亞小區に屬するを知る。

(三) 演習林の森林植生概説並に主要森林群叢

演習林は七團地に分かれ散在するを以て各團地によりて植生に著しき相違あり。殊に地質の相違による差異には相當著しきものあるを以て以下各團地に就きて森林植生の概況を述べん。

新建團地

本團地は比較的永く人爲的攪亂を蒙らざりし爲本演習林中最も進行し稍々極盛相に近き觀あり。谷間は水分、光線關係良好なる爲、林床植物の發達は極めて良好にしてオホバノハチジャウシダ、クマワラビ、キノデ、カタキノデ、シロヤマシダ、オホヒメワラビ、シケンダ、ヒカゲワラビ、オホバノキノモトサウ、クリハラン、ハカタシダ、ミゾシダ、フモトシダ、ヤブソテツ、シラガシダ、タニイヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ホソバカナワラビ、シケチシダ、キヨタキシダ、イハガネゼンマイ、イハヘゴ等の羊齒類最も多く之等の間にはヒメウハバミサウ、ダイコンサウ、

ミヅタピラコ、ヤマトキホコリ、チャルメルサウ、ミヅヒキ、シンミヅヒキ、ヌマダイコン、ミヅタマサウ、ヌスビトハギ、ツリフネサウ、ハナタデ、ハシカグサ、オホバチドメグサ、モミチガサ、ヒメバライチゴ、キミヅ、オホサンセウサウ、ハダカホホヅキ、キノコヅチ、ハグロサウ、ボロギク、カントリサウ、アシボソ、ササガヤ等の稍々好蔭性の植物密生し之等の上部にはニハトコ、ゴマキ、コヤブデマリ、ウツギ等散生し更に之等の上方にはカラスザンセウ、エノキ、ムクノキ、ミヅキ、クマノミヅキ、チシヤノキ、アヲガシ等殆んど落葉喬木優勢を示す。之等の樹幹にはアケビ、ミツバアケビ、ムベ、ボタンヅル、ツルカウゾ、クズ、ヤマフデ、キジヨラン、カギカツラ、マタタビ、オホツヅラフデ、アラツヅラフデ、サンカクヅル、ウラジロマタタビ、カラスウリ、モミチカラスウリ等の蔓性植物纏繞す。

之等谷間より稍々上方に進めば上記草本類、落葉樹、蔓性植物は漸次減少し上木はアラカシ、コナラ、シロダモ、ヤブニクケイ、ノグルミ、エノキ、イロハモミチ等多く上記落葉喬木も尙相當混生す。下木としてはアラキ最も多くヒサカキ、ヤブムラサキ、イヅセンリヤウ、ネズミモチ、コマユミ等も相當多く、之等の下部にはヤブカウジ、フユイチゴ、ホソバカナワラビ等散生するに過ぎず。更に四百米—五百米附近に到れば林縁谷間以外には林床植物少くホソバカナワラビ、フユイチゴ、キツカウハグマ、シハイスミレ、ツルニガクサ等散生するに過ぎず、上木にはウラジログシ、アカガシ、コナラ、アラカシ等のカシ類の外イヌシデ、アカシデ等多く之等の間にはシロダモ、ヤブニクケイ、シナノガキ、イイギリ、カナクギノキ、カゴノキ、タブ、コジヒ、クマノミヅキ、アイグロマツ等混生し、之等の下部にはツバキ、シキミ、ヒサカキ多くネズミモチ、カマツカ、リョウブ、モチノキ等之等に亞ぐ。峯通り附近にはイタヤメイゲツ、ツリバナ、アラハダ、ヤマカウバシ、アカシデ、ウラジロノキ、アカガシ、ユヅリハ、アサダ、シラキ等の温帯下部に見る植物現はれ、之等の下部にはツルシキミ多くヤマヂノホトトギス、ノコンギク、シハイスミレ等も散生す。

荒平園地

荒平園地は古生層よりなり傾斜急なり。上半部は杉の造林地にして下半部は常緑

潤葉樹林よりなりシロダモ、ヤブニクケイ、シラカシ、ウラジロガシ、アラカシ、イス、クス、リンボク、ヒメユズリハ、タブ、イヌガシ、ゴンズキ、タイミンタバナ、ネズミモチ等の常緑樹多く、之等の間にはエノキ、コバノテウセンエノキ、ハマクサギ、チシヤノキ、エゴノキ、ニガキ、ノグルミ、コナラ、ムクノキ等の落葉樹を混生す。之等の樹幹にはカギカヅラ、ナシカヅラ、ホウライカヅラ、テイカカヅラ、キジヨラン、イタビカヅラ、テリハノブドウ、ヤマフデ、オホツヅラフデ、アヲツヅラフデ、ツルウメモドキ、ツルカウゾ、ヤマイバラ、ボタンヅル、エビヅル等の蔓性植物纏繞し旺盛なる繁茂を示す。谷間の部分には林床植物の發達よくクマワラビ、ナガバヤブソテツ、シケシダ、イハガネゼンマイ、キノデ、クリハラン、イハヘゴ、ホシダ、ミヅシダ、イブキシダ、ホソバカナワラビ等の羊齒類の外アリドウシ、シラスゲ、アラキ、ヤマムグラ、ジヤクヒゲ、サツマイナモリ、ダイリンアフヒ、ヒメヤブラン、キチジヨウサウ、フユイチゴ、オホバノチドメグサ、ヒロハテンナンセウ、サツマスゲ、イツセンリヤウ、キノコヅチ、オホサンセウサウ、シンミヅヒキ、ミヅヒキ、オホバチドメグサ、ヤブカウジ等多し。杉造林地内にはツヤナシキノデ、クマワラビ、シラガシダ、ヤブソテツ、コササクサ、ヒロハテンナンセウ、チヂミザサ、コチヂミザサ、ミヅタマサウ、アキノタムラサウ、ハダカホホヅキ、フユイチゴ、キエビネ、エビネ、ヌスビトハギ等の草本類多し。

大倉園地

大倉園地は大倉、御手洗水の二つに分かれ、大倉はクロマツを上木とし下部は全部杉の造林地にして固有の林相を見ること難けれども林床植物は新建園地に極めて近似しアラキ、マルミノヤマゴバウ、ヤマホホヅキ、ハダカホホヅキ、マツカゼサウ、モミヂガサ、オモト、シラガシダ、キエビネ、エビネ等の好陰性の植物多く、本園地の林相は伐採前迄は植生變移上相當進行せし群落なりしを窺知するに難からず。

御手洗水の森林は之迄數回火災に罹りたる關係上植生變移上より見るときは初期に屬し峯通りの稍々乾燥する箇所には往々岩石露出しアイグロマツ—コシダ群叢散在し、アイグロマツ最も多く、ヤマモモ、ネヅミサシ、クロキ、ネヂキ、シヤシヤンポ、リョウブ、コバノトネリコ等之に亞ぎ、イヌツゲ、ソヨゴ、ヤマツツジ、

イヌザンセウ、カンコノキ等も散生す。之等の下部にはコシダ最も多く、ウラジロ、イトスズメガヤ、スヽキ、イガクサ、リンダウ、キキヤウ、ヤマジノギク、トダシバ、アヲメカルカヤ、ヲカルカヤ、モロコシガヤ、ヲミナヘシ、ヲトコヘシ、イトハナピランツキ、ノグサ等の草本多く往々ハナゴケの類を混生せる所あり。之等峯通りの部分を除けば殆んど全部アイグロマツ—ウラジロ群叢に屬し、三、四十年内外の松の上木最も優勢にして之等の間又は下部にはシロダモ、ヤブニクケイ、ツバキ、シリブカガシ、ウラジロノキ、アハブキ、コナラ、ホルトノキ、ニガキ、クスノキ、エゴノキ、ネズミモチ、タイミンタチバナ、アラカシ、リョウブ、タブ、ナ、メノキ等生育し林床にはチヂミザサ、キツカウハグマ、ミヅヒキ、シハイスミレ、ホソバカナワラビ、オホカグマ、イチヤクサウ等散生し、谷間にてはアラキ、ミヅヒキ、ケヤキ、イヅセンリヤウ、ムクノキ、カラスザンセウ等の發生せる箇所あり。

上ノ山園地

上ノ山園地は古生層に屬し、蛇紋岩、綠泥片岩よりなり、林齡三十年内外のアイグロマツの造林地にして現在は大部分アイグロマツ—ウラジロ群叢に屬し、東側境界附近にはアイグロマツ—コシダ群叢現はれネヅミサシ、タイミンタチバナ、コバノテウセンエノキ、クロキ、ネヂキ、シヤシヤンボ等の木本植物混生す。

飯盛園地

本園地も古生層に屬し、現今殆んど全部スギ、ヒノキ、マツの造林地と化せるを以て固有の林相を知るは困難なるも林床植物より推察せば大略上ノ山に近きが如し。

鬼ヶ浦園地

本園地は殆んど全部第三紀層に屬し、全部アイグロマツの天然林よりなり下部にはウラジロ優勢にして所謂アイグロマツ—ウラジロ群叢に屬す。然れども丘陵状態の鞍部にはアイグロマツ—コシダ群叢發生し上木にはアイグロマツ最も多く之等の間にはシヤシヤンボ、ネヂキ、ヤマモイ、ネヅミサシ、クロキ、イヌツゲ、クロガネモチ、クチナシ、ナツハゼ、コナラ、リョウブ等散生し林床にはコシダ最も多く

トダシバ、ヲカルカヤ、メカルカヤ、モロコシガヤ、ス、キ、アリノタウグサ、キキヤウ、ヲミナヘシ、ワラビ、アキノキリンサウ等の陽性の草本類散生するに過ぎず。

生ケ谷園地

本園地は大部分 アイグロマツ—ウラジロ群叢なるも 西部境界の峯通り附近にはアイグロマツ—コシダ群叢現はれネヅミサシ、クロキ、ネヂキ、シヤシヤンボ、ナツハゼ、ヤマモモ等の木本を混す。谷間には往々アイグロマツの下部にゴキダケ、メダケ群生せる所あり。

演習林内に於ける主なる森林群叢

演習林内に於ける森林群叢を大約次の四群叢に區別し得るが如し。

1. アイグロマツ—ウラジロ群叢
2. アイグロマツ—コシダ群叢
3. コナラ、アラカシ—アヲキ、ホソバカナワラビ群叢
4. $\left. \begin{array}{l} \text{コナラ、アラカシ} \\ \text{ウラジロガシ} \\ \text{ノグルミ、イヌシデ} \end{array} \right\} - \left. \begin{array}{l} \text{フエイチゴ} \\ \text{ホソバカナワラビ} \end{array} \right\} \text{群叢}$

1. アイグロマツ—ウラジロ群叢

(*Pinus densiflora* × *P. Thunbergii* — *Dicranopteris glauca*) Association

本群叢は鬼ヶ浦、生ケ谷、上ノ山、大倉園地の大部分を占め（植生圖参照）上木としてはアイグロマツ最も多く、殆んど純林状を呈し之等の下部にはクロキ、リョウブ、クロガネモチ、ネズミモチ、ハマクサギ、エゴノキ等の潤葉樹散生し、更に之等の下部にはウラジロ最も優勢なる型なり。本群叢は自然に放置するときは中間を占むる潤葉樹並に更に侵入する好陰性の樹種の繁茂と共に漸次暖地固有のシヒ、タブ等を主とする群叢に推移するは他所に於ける多くの例に徴しても明かなり。又演習林内にて松茸を産する林は本群叢に限られるが如し。

2. アイグロマツ—コシダ群叢

(*Pinus densiflora* × *P. Thunbergii* — *Dicranopteris dichotoma*) Association

本群叢は鬼ヶ浦、生ヶ谷、大倉、上ノ山の四圍地の比較的乾燥する峯通りに散在的に現はる(植生圖参照)。

上木としてはアイグロマツ最も優勢にしてネヅミサシ、ヒサカキ、クロキ、シヤシヤンボ、ネヂキ、ナツハゼ、ヤマモモ、ヤブハギ等散生すれども共に生長不良にして庭木状を呈するもの多し。本群叢は多く上記アイグロマツ—ウラジロ群叢に推移する場合多く、往々ウラジロ、コシダ混生し稍々明かなる推移帯を示せる箇所あり。コシダはウラジロに比し耐陰性小なるが如く林内稍々鬱閉するときは漸次生育悪化し漸次ウラジロにより置換せらるゝが如し。

3. コナラ、アラカシ—アヲキ、ホソバカナワラビ群叢

$$\left. \begin{array}{l} \text{Quercus serrata} \quad \text{Aucuba japonica} \\ \text{Quercus glauca} \quad \text{Polystichum aristatum} \end{array} \right\} \text{Association}$$

本群叢は新建圍地の下部及荒平圍地に見られ(植生圖参照)、上木としてはアラカシ、コナラ最も優勢にしてヤブニクケイ、ノグルミ、エノキ、シロダモ、タブ、カゴノキ等之に亞ぎ、下部にはアヲキ最も優勢にしてヒサカキ、ネズミモチ等之に亞ぎ、之等の下部には下草少く只ホソバカナワラビ散生する型なり。

$$4. \left\{ \begin{array}{l} \text{コナラ、アカガシ} \\ \text{ウラジロガシ} \\ \text{ノグルミ、イヌシデ} \end{array} \right\} - \left\{ \begin{array}{l} \text{フユイチゴ} \\ \text{ホソバカナワラビ} \end{array} \right\} \text{群叢}$$

$$\left. \begin{array}{l} \text{Quercus serrata} \\ \text{Quercus acuta} \quad \text{Rubus Buergeri} \\ \text{Quercus stenophylla} \quad \text{—} \\ \text{Platycarya strobilacea} \quad \text{Polystichum aristatum} \\ \text{Carpinus Tschonoskii} \end{array} \right\} \text{Association}$$

本群叢は新建圍地に於ける上記群叢の上方に現はれ兩者の間に判然たる區劃を設けること困難なるも大約四百五十米附近にては稍々區別し得るが如し(植生圖参照)。上木としてはアカガシ、コナラ、ウラジロガシ、イヌシデ、ノグルミ優勢にしてヤブニクケイ、シロダモ、シナノガキ、カナクギノキ、タブ、コジヒ、クマノミヅキ、イイギリ、アイグロマツ之に亞ぐ。之等の下部にはツバキ、ヒサカキ最も多くアヲキ、ヤブムラサキ、イヅセンリヤウ、シキミ等之に亞ぎ、下部には殆んど下草を欠ぎ只フユイチゴ、ホソバカナワラビ等散生するに過ぎず。